

## 雑司ヶ谷研究 6

——集合住宅居住者の近隣交流実態——

### Zoshigaya Study 6

—Neighborhood Interchange of Apartment Complex Resident—

住居学科  
Dept. of Housing and Architecture

三浦 茜  
Akane Miura

薬袋 奈美子  
Namiko Minai

**抄 録**。地図上で1987年から現在までの雑司ヶ谷に集合住宅の更新状況を確認していくと、これまで地域内の至るところで建物は更新され続けてきた。また、建物の更新は、集合住宅の形態とは関係なく、どの建物形態でも更新されてきた。建物の更新や集合住宅という定住性の低さから、地域内での集合住宅居住者の入れ替えは頻繁にされてきたと考えられる。そこで、集合住宅の居住者を雑司ヶ谷の新住民と捉え、地域内での活動範囲と地域住民との付き合いの実態について集合住宅の形態別に調査した。集合住宅への入居理由は交通の利便性が高い割合を占めているが、棟別アクセス型では、分譲の集合住宅も多く定住意識の高い居住者が多いと考えられ、入居の際周辺環境への意識も見られた。地域住民との交流は、十分な交流が出来ているとは言えないが、どちらの形態の集合住宅の居住者も、地域内の商店街を日常的に利用しており、今後の近隣交流において重要となりうる。

**キーワード**：近隣交流，集合住宅，建物形態，地域コミュニティ，商店街

**Abstract** When I confirm the change of the apartment complex of zoshigaya from 1987 to 2012 on the map, everywhere in the area was rebuilt. And these changes have nothing with the form of the buildings. I guess that the replacement of apartment complex residents occurs frequently. So I regarded the apartment complex residents as new inhabitants and investigated the territory and the neighborhood interchange in the area according to the forms of the buildings. The residents often claim that the transportation convenience was the main reason in choosing their current house. But the residents who live in the high-rise apartment consider the neighboring environment when they choose their current house. Because the sedentary rate can be high in particular types of apartment, such as condominiums. Regardless of the form of building, the neighborhood interchange is not enough. But residents usually use a shopping street. Therefore the shopping street can become important space for neighborhood interchange.

**Keywords**: neighborhood interchange, apartment complex, form of building, local communities, shopping street

### 1. はじめに

#### 1.1. 背景と目的

近年、特に東日本大震災以降、地域コミュニティの重要性が見直される傾向が高まっている。地域内の住民が日常的に交流をもつことは、災害時のような緊急時にも助け合える環境の土台となると考えら

れる。

密集市街地のような道が狭く建物同士が近接する地域では、住民同士の気配を間近に感じられ、普段から家の前で住民同士が立ち話をする姿があったり、通りに向けて鉢植えや縁台を置く家が見られたりと、家の前の通りや路地が生活空間の一部であり、かつ、近隣との繋がりの場となっている。

豊島区雑司が谷も一戸建て住宅が中心の密集市街地として東京都の重点整備地域に指定されており、まちなかの様々なところで住民同士の交流が見られる。しかし、近年では、老朽化建物の建替えなどによって集合住宅の建設が進み、まちなみや地域住民の交流に変化が見られている。

また、表1のように、平成22年の国勢調査では、雑司が谷の世帯数を住居の種類別に示している。全体として共同住宅の世帯数は一戸建・長屋建の世帯数の2倍の世帯があることが分かった。三丁目の場合、共同住宅の世帯数は一戸建・長屋建の世帯数の3.5倍もあり、今後は地域住民の中で集合住宅居住者が多数を占めるようになることが考えられる。

本稿では、新規入居者が多いと推測される集合住宅の居住者の近隣交流の実態と、居住者たちの雑司が谷への印象や交流の変化を確認する。

表1. 雑司が谷の住居の種類別世帯数

	一戸建	長屋建て	共同住宅	その他	総数
全体	1535 29.9%	113 2.2%	3470 67.5%	23 0.4%	5141
1丁目	726 35.9%	29 1.4%	1257 62.1%	11 0.5%	2023
2丁目	534 30.8%	52 3.0%	1141 65.8%	6 0.3%	1733
3丁目	275 19.9%	32 2.3%	1072 77.4%	6 0.4%	1385

## 1.2. 既往研究

これまでの集合住宅居住者と近隣交流に関する研究として、仁瓶浩二らの“集合住宅による地域環境形成に関する考察—地域環境形成から見た集合住宅計画に関する研究”が挙げられる。ここでは、地域内に新たに集合住宅が建設される時、新規入居者と地域住民の交流は集合住宅内に交流空間となる施設を計画することによって解決されてきた。泉水花奈子の“密集住宅地における一戸建て住宅の境界領域の利用実態—雑司が谷を対象として—”では、一戸建て住宅において、住戸前の溢れ出しや縁台などでの近隣交流の実態などに触れている。

また、集合住宅の建て替えに関する研究として、宮原治らの“千里ニュータウンの公的集合住宅建て替えによる住区構造の変容”のように、開発的な建て替えによる市民の歩行空間や通行の変容について

触れている。

しかし雑司が谷は、大規模なマンション開発は難しいが、地域内で頻りに集合住宅の建設や建て替えによってまちなみの変化が起こっている。また既存の商店街や地域のつながりがある地域である。このような地域における、集合住宅の更新実態を明らかにし、居住者の日常的な活動範囲と近隣交流の実態を調査した研究はあまり見られない。

## 1.3. 調査対象・調査方法

本研究の調査対象は、住所が豊島区雑司が谷\*1～3丁目の集合住宅\*2とした。

調査方法は、ゼンリン住宅地図を用いて、1987年から2012年までの集合住宅の更新実態を5年ごとに把握すると共に、地域内の通りの位置づけをすることで、集合住宅の更新における立地状況を把握する。

次に、目視調査により集合住宅の形態ごとの立地状況を調査する。

また、アンケート調査によって、集合住宅居住者の地域内での交流実態を調査する。アンケートはポスティングによる配布と郵送回収にて行い配布数3202件のうち496件(15.5%)から回答を得られた。(表2参照)

表2. 調査概要

建物形態調査	調査方法：目視調査 調査機関：2013年10月7日～11月8日 11月28日～11月30日
交流実態調査	調査方法：アンケート調査 (ポスティング配布と郵送回収) ・配布数：3202件 ・回答数：496件(回答率：15.5%) 配布期間：2013年11月28日～11月30日

## 2. 集合住宅の実態

### 2.1. 集合住宅の更新実態

図1には1987年から2012年までの地域内の集合住宅の更新を5年ごとに示した。また、年ごとに集合住宅の立地状況を把握したものを表3に示す。

図1より、雑司が谷地域内の集合住宅の更新は、地域内の至る所で更新され、増加してきたことが分かった。1987年～1992年の更新状況を見ると、2丁目の地域の内側での更新が目立つが、2000年以降

は幹線道路沿いの集合住宅の更新が多く見られることが分かった。

さらに表3に示すように、集合住宅全体の棟数は1987年から2012年の25年間で1.5倍に増加していることが分かった。また、幹線道路沿いの集合住宅が地域全体の集合住宅に占める割合が増加している。幹線道路沿いの集合住宅では1987年から1992年と2002年から2007年でそれぞれ前年に比べて約30%増加している。2002年から2007年の増加は、2008年に副都心線の雑司が谷駅が開通し利便性が高まったことも一つの要因として考えられる。

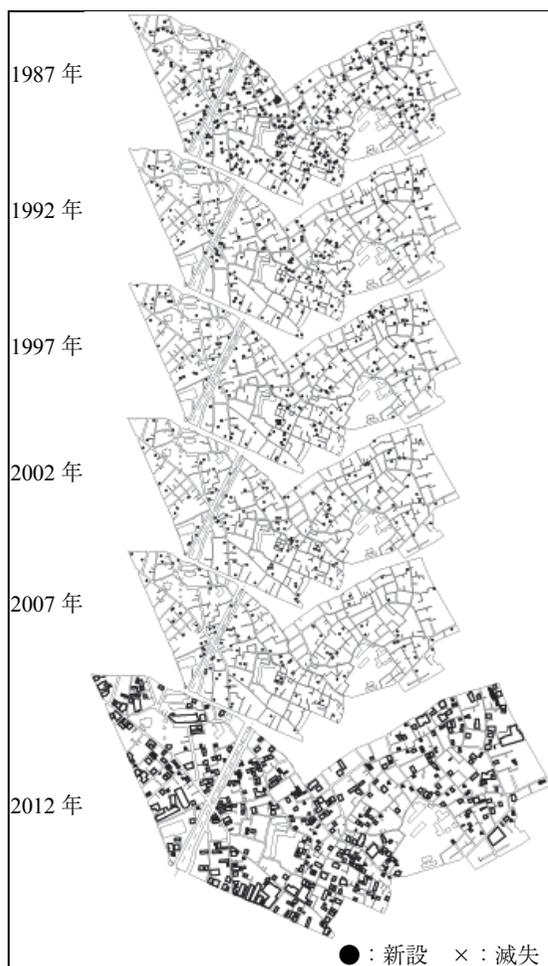


図1. 集合住宅の更新

表3. 集合住宅の立地状況

	1987年	1992年	1997年	2002年	2007年	2012年
幹線道路	49	64	67	67	86	98
前年比	—	1.31	1.05	1.00	1.28	1.14
地域内に占める割合	17.8%	19.3%	17.8%	19.5%	23.8%	24.4%
商店街	79	91	112	103	101	109
前年比	—	1.15	1.23	0.92	0.98	1.08
地以内に占める割合	28.6%	27.4%	29.8%	30.0%	27.9%	27.1%
生活道路	148	177	197	173	175	195
前年比	—	1.20	1.11	0.88	1.01	1.11
地域内に占める割合	53.6%	53.3%	52.4%	50.4%	48.3%	48.5%
全体	276	332	376	343	362	402
前年比	—	1.20	1.13	0.91	1.06	1.11

## 2.2. 集合住宅の形態別の立地状況

目視調査では、図2に示すような集合住宅の形態ごとの立地を調査し、図3に示す。

まず棟別アクセス型とした集合住宅は、一般的にマンションと認識されることの多い、高層の集合住宅としている。また、棟別アクセスタイプでは分譲型の住宅も多いと想定している。

次に階別アクセス型とした集合住宅は一般的にアパートと認識されることが多い、中低層の集合住宅としている。階別アクセス型では、棟ごとにアクセスするタイプの集合住宅でも低層でアパートと認識されることが多いと考えられるものは階別アクセス型に含んでいる。また、階別アクセス型には賃貸型の住宅が多いことを想定している。

最後にどちらにも属しないと判断したものをその他に分類した。その他のタイプには集合住宅内の各住戸が一戸建て住宅のように独自のアプローチを持つものや、下宿のように一つの建物に複数人が住んでいるものを分類した。

なお、集合住宅の立地状況を調査するにあたって、地域内の通りの位置づけをし、表に示した。幹線通りは地域住民だけでなく、外部からの通行も多い道路としており、明治通り、目白通りは副都心線雑司が谷駅だけでなく、JR線池袋駅や目白駅へのアクセスも良い通過交通の非常に多い通りと言える。商店街\*は雑司が谷内の弦巻通り商友会、鬼子母神西参道商店街、鬼子母神通り商友睦会を指し、利用は主に地域住民だが、地域住民以外の通過も地域内の

通りでは多い。生活道路は幹線道路、商店街に含まれない通りを指し、地域住民の日常の移動や生活行為の場として利用されている。

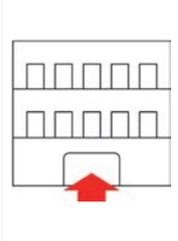
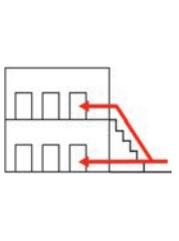
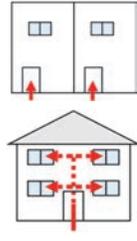
棟別アクセス型	階別アクセス型	その他
		
エントランス有 4階以上	外階段有 エントランス有 3階以下	長屋形式 ○○荘形式 シェアハウス

図2. 集合住宅の形態

集合住宅の形態ごとの立地状況は、棟別アクセス型に見られる規模の大きい集合住宅は幹線道路沿いの交通の便の良い場所に立地しているが、商店街や、雑司が谷霊園沿い、道幅の狭い地域内部の通りにも立地しており、その場合、周囲の道や住宅に圧迫感を与えている。

階別アクセス型とその他に分類される集合住宅は地域全体に立地しており、路地や行き止まり道路にも見られ、周囲の一戸建て住宅と共に密集している。

また表に示すように、地域全体での集合住宅の形態別の割合は、階別アクセス型が全体の70.2%を占めている。また、一丁目にはその他の形態の集合住宅の20.4%と他に比べて多い。一丁目は地域内でも土地の区割りが大きいものも多く、ミニ開発のように、各住戸が独立した長屋型が多く見られると考えられる。

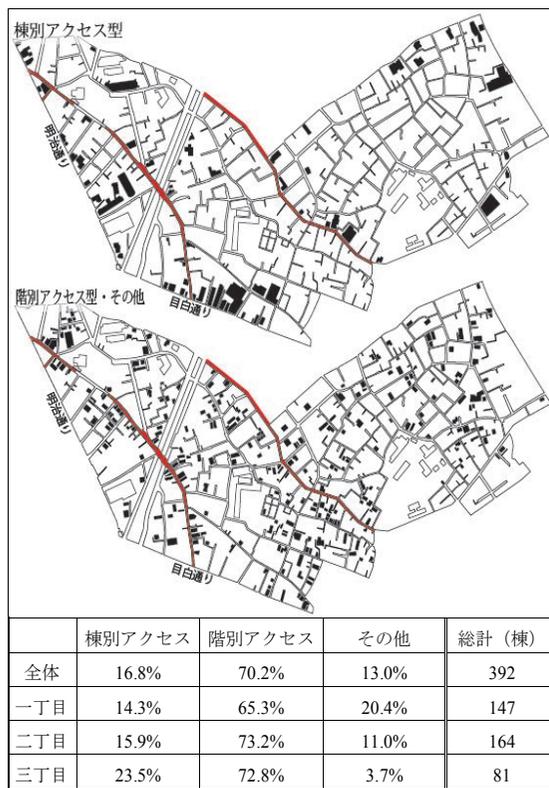


図3. 集合住宅の立地状況

### 3. 住民の交流実態

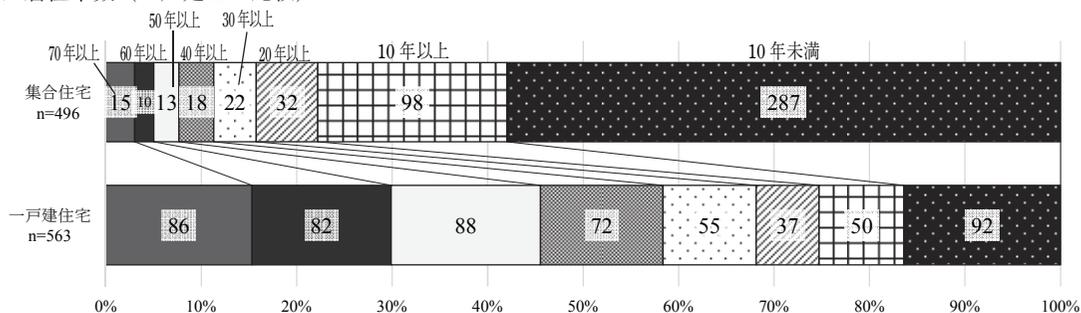
#### 3.1. 居住者

第2章で述べたように、集合住宅の更新は地域内全体で建物の形態に関係なく行われており、それに伴って集合住宅の居住者の入れ替わりは多いと考えられる。そこで、本稿のアンケート調査では集合住宅居住者を地域内の新住民と捉えて、地域住民との交流実態を明らかにするものとして行った。

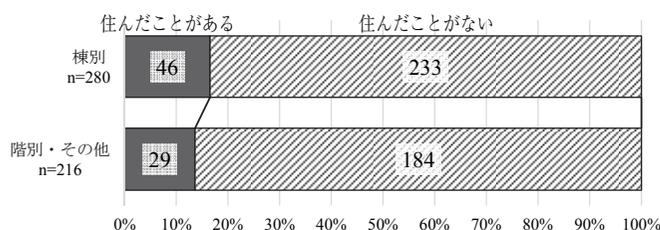
アンケート回答者の基本情報は図4に示すように、居住年数は10年以内の居住者が半数以上を占めている。一戸建住宅の居住年数と比較すると、一戸建住宅では、居住年数の長い人も短い人も均等にいる。これまでに雑司が谷に住んだことの無い人についても、棟別アクセス型、階別アクセス型、その他の分類共に非常に多い。これらのことから、集合住宅居住者には比較的居住歴の浅い、所謂“新住民”が多いといえる。

さらに家族構成について、棟別アクセス型は複数人での居住形態が57.1%と単身世帯より多いのに対し、階別アクセス型は単身世帯が67.6%を占めている。職業についても棟別アクセス型では階別アクセス型に比べ専業主婦の割合が多かったのに対し、階別アクセス型では棟別アクセス型と比較して学生の割合が多いことが分かった。

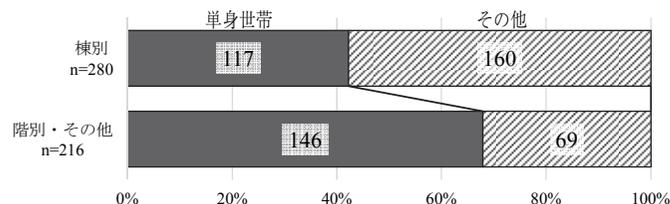
A. 居住年数（一戸建との比較）



B. これまで雑司ヶ谷に住んだことがあるか（建物の形態別）



C. 家族構成（建物の形態別）



D. 職業（建物の形態別）

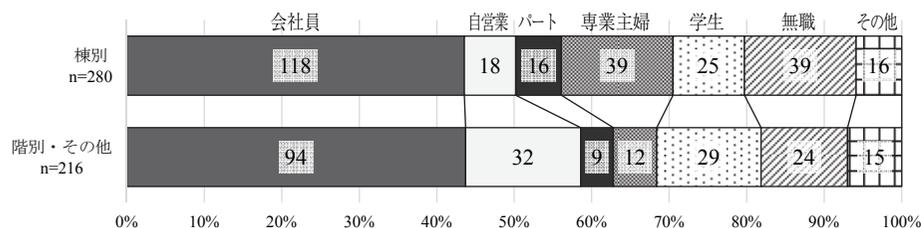


図 4. 回答者の基本情報

3.2. 入居理由とその後の意識の変化

表 4 に示すように、現在の住まいを選ぶうえで重視した項目として、どの形態でも通勤・通学の便を最も重視していることが分かった。また、緑・公園・まちなみという周辺環境を考慮した項目についての回答数は、棟別アクセス型の方が多かった。理

由として、棟別アクセス型は、階別アクセス型に比べ分譲住宅が多いと考えられ、定住性により周辺環境へ考慮する回答が増えたということが考えられる。

入居時に重視することを泉水らによる一戸建て住宅での調査と比較すると、表 5 に示すように、周辺環境を考慮する回答が交通の便と同様に多く回答さ

れており、交通の便に特化して住まいを選ぶということが集合住宅居住者の特徴といえる。

また、表6に示すように、入居後の雑司が谷の印象は、棟別アクセス型では、都電の通るまちという回答が半数を超え最も多く、交通の便が良い、静かという回答が続いた。階別アクセス型では、静か、都電の通るまち、昔ながらのまちなみと、まちなみの印象が強いという回答結果となった。棟別アクセス型で交通の便が良いという結果が多かったのは、棟別アクセス型のような地域内では大規模の集合住宅は、幹線道路沿いやまちなかの大きい道路に面していることが多く、移動に便利であることが考えられる。一方階別アクセス型は地域内の狭い通りにも面しているため、地域外の人との交通が無いことでの静かさや路地などのまちなみを意識する意見が多かったと考えられる。

さらに、集合住宅の居住者たちの雑司が谷への定住意識について表7に示した。どちらの形態でも、雑司が谷に住んでいたいという回答が多かった。棟別アクセス型では、先に述べたように、分譲住宅が多いことが考えられ、現在の住まいへの定住意識が高かった。一方、階別アクセス型では現在の住まい

への定住意識と、雑司が谷への定住意識がほぼ同じという結果になった。

定住意識に関して、居住者の家族構成別に見ると、現在の住まいに関わらず雑司が谷に住み続けたいと回答する人が、単身世帯では76.0%、その他の複数人の世帯では80.3%と、複数人の世帯では定住意識が高い。また、単身者の定住性を建物の形態別に図5に示した。単身者の今の住まいに住み続けたいという回答は棟別アクセス型に多く見られる特徴だが、住まいに関わらず雑司が谷に住み続けたいという回答は建物の形態は関係しないということが分かった。

### 3.3. 集合住宅居住者の人付き合いの有無

同じ近隣の住民との人付き合いについて、表8に示した。集合住宅の形態に関わらず、話す(よく話す、たまに話すを含む)と回答した人と話さないと回答した人は、どちらも半数となった。また、話す人と回答した人の年齢構成を表9に示した。10代は0.9%であり他の年代に比べ交流する人が少なく、60代は20.5%であり他の年代に比べ交流する人が多い結果となったが、他の年代では年代ごとに交流に大きな差がないことが分かった。

表4. 建物の形態別入居理由

	価格	通勤通学の便	緑・公園街並み	商業・公共医療施設	外観デザイン	外との繋がり	プライバシー	防犯性がある	家選びに関わっていない	その他	無効未回答
全体 n=496	3.6%	45.0%	16.1%	3.6%	0.2%	1.0%	0.4%	0.4%	6.7%	15.9%	7.1%
棟別 n=277	2.5%	44.0%	19.1%	4.0%	0.4%	1.1%	0.0%	0.4%	6.1%	14.8%	7.6%
階別 その他 n=219	5.0%	46.1%	12.3%	3.2%	0.0%	0.9%	0.9%	0.5%	7.3%	16.9%	6.4%

表5. 一戸建て住宅居住者の家を作る・選ぶ際に重視した点\*3 (引用文献3より作成)

	価格	間取り	通勤通学の便	周辺の公共施設	耐震構造	緑・公園街並み	外観デザイン	遮音性	開放性	プライバシー	家選びに関わっていない	その他
一戸建 n=563	40.0%	39.3%	34.5%	23.4%	32.3%	36.1%	12.4%	9.9%	6.9%	11.5%	23.4%	8.3%

表 6. 入居後の雑司が谷の印象\*3

	緑が多い	都電の通るまち	路地が多い	昔ながらのまちなみ	静か	活気のあるまち	交通の便が良い	高齢者が元氣	祭りが盛ん	緑が少ない	地下鉄の通る街	うるさい	元気がないまち	高齢化が深刻	その他
全体 n=496	27.2%	46.6%	30.4%	32.1%	39.5%	1.0%	31.9%	6.9%	26.4%	1.4%	2.4%	1.0%	3.2%	3.4%	5.0%
棟別 n=277	28.9%	50.5%	32.5%	29.6%	34.3%	1.1%	35.7%	6.5%	24.5%	1.8%	3.2%	1.1%	2.2%	4.3%	4.3%
階別 その他 n=219	25.1%	41.6%	27.9%	34.7%	45.7%	0.9%	26.9%	7.3%	28.8%	0.9%	1.4%	0.9%	4.6%	2.3%	5.9%

表 7. 雑司が谷での定住意識

	今の住まいに住み続けたい	住まいは変えても雑司が谷に住み続けたい	他所に移りたい	その他
全体 n=496	48.0%	30.8%	9.7%	10.9%
棟別 n=277	54.5%	25.3%	9.0%	10.5%
階別・その他 n=219	39.7%	37.4%	10.5%	11.4%
単身世帯 n=263	41.4%	34.6%	11.4%	12.5%
その他 n=238	54.2%	26.1%	7.6%	8.8%

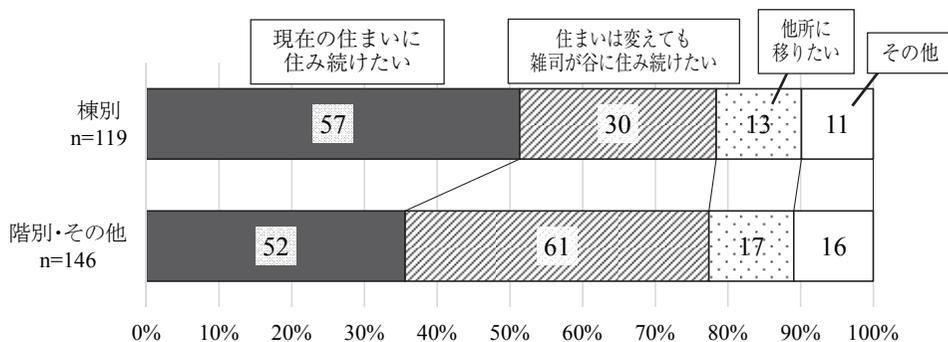


図 5. 単身者の定住性 (集合住宅の形態別)

表 8. 近隣住民との交流の有無

	よく話す	たまに話す	ほとんど話さない
全体 n=496	9.1%	35.7%	52.8%
棟別 N=277	8.3%	36.5%	52.3%
階別・その他 n=219	10.0%	34.7%	53.0%

表 9. 話す人の年齢構成

(よく話す, たまに話すと回答した人対象) n=222

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代~
0.9%	10.7%	15.8%	17.5%	13.2%	20.5%	14.1%	7.3%

### 3.4. 話す人の交流実態と活動範囲

表 10 に、近隣の住民と話すと回答した人を対象として、地域内のどこで話すかについて示した。結果として棟別アクセス型では商店街や路地などの道端が 51.6%で、階別アクセス型では商店街等の店先という回答が 45.9%で最も多かった。また、階別アクセス型では、相手の家先という回答が多かったことが特徴として挙げられる。

表 11 には、表 10 に示す話す場所と同様に、近隣住民でよく話す人を示した。集合住宅の形態に関わらず、商店街の店の人と話すという回答が多かった。しかし、棟別アクセス型と階別アクセス型を比較すると、子どもの学校の PTA 活動や地域のイベントで知り合った人と話すという回答がやや多かった。集合住宅居住者の基本情報の家族構成でも示したように、棟別アクセス型では単身世帯より複数人の家族世帯の方が多くことから、子どもの学校行事や地域イベントで知り合う機会が自然に多くなることがいえる。

また、交流実態によって雑司が谷を歩く場面を表 12 に示した。話すと回答した人の雑司が谷を歩く場面は商店街に買い物に行くときが 67.6%と最も多く、半数もの人が日常的に地域内を散歩していることが分かった。このように話すと回答している人は日常的に地域内を散歩する目的で歩いていることが多い。

さらに、話すと回答している人のこれまでの雑司が谷での居住歴を表 13 に示すように、全体としての新規住民の割合は 85.5%であるのに対し、話す人の新住民の割合は 77.7%と低くなっていることが分かった。このことから、近隣住民と話す人は雑司が

谷に地縁のあることも要因であると考えられる。

### 3.5. 話さない人の理由と今後の交流意欲

近隣の住民と話さないと回答した人を対象に話さない理由の回答を表に示した。全体に、話すきっかけがないことや、生活時間が違うことから近隣の住民と顔を合わす機会が無いことが理由に挙げられている。棟別アクセス型では、話すきっかけがないという回答が 58.6%を占めているのに対し、階別アクセス型では 50.0%と約 1 割少ない結果となった。しかし、階別アクセス型では、よく知らない人と話すことに抵抗があるという回答が棟別アクセス型に比べて多かった。また、棟別アクセス型では世代が違うという項目の回答は無かったが、階別アクセス型ではわずかにあった。

表 12 に示すように、話さない人の雑司が谷を歩く場面も示した。話さない人の回答は通勤通学時が 63.0%、駅まで歩くが 66.4%と通過的に地域を歩いていることが多いことが分かった。しかし、商店街に買い物に行くという回答も多く、近隣住民と話すことのない人でも商店街を利用していることが明らかになった。話さない人の商店街の利用として、会社員や学生などは帰宅時間が遅いことも考えられるため、チェーン店やコンビニエンスストアなどの営業時間の長い店の利用が多く、会話などは特に無い可能性がある。

また、今後、近隣の住民と話してみたいという意欲はあるのか、表 15 に示した。どちらも今後話してみたいという意欲があるという回答が 76.1%と、きっかけがあれば、より近隣の住民たちと話し、交流することに賛成であることも分かった。

表 10. 近隣住民と話す場所

	自分の マンションの下	相手の家先	商店街など の店先	商店街や路地 などの道端	公園や神社などの 散歩に行った時	その他
全体 n=222	10.8%	24.3%	46.4%	47.7%	19.8%	9.0%
棟別 n=124	12.9%	16.9%	41.1%	51.6%	19.4%	15.3%
階別・その他 n=98	8.2%	31.6%	45.9%	41.8%	19.4%	15.3%

表 11. 近隣住民とよく話す人

	子どもの学校の PTA で知り合った人	地域のイベントで 知り合った人	買い物や散歩中 によく会う人	商店街の店の人	その他
全体 n=222	17.6%	18.0%	28.8%	44.1%	27.5%
棟別 n=124	19.4%	21.0%	27.4%	45.2%	29.8%
階別・その他 n=98	12.2%	14.3%	27.6%	43.9%	32.7%

表 12. 雑司が谷を歩く場面

	通勤・通学	駅まで歩く	商店街に 買い物に行く	散歩する	子どもを 遊ばせる	歩かない	その他
話す人 n=222	43.2%	62.2%	67.6%	50.0%	8.1%	0.5%	7.7%
話さない人 n=262	63.0%	66.4%	55.0%	41.6%	0.0%	4.6%	3.8%

表 13. 雑司が谷以外の居住歴 n=222 (未回答 2 件)

	以前は他地域に 住んでいた	雑司が谷に住んでいたが 一時的に他地域に 住んだことがある	親の代から 雑司が谷に 住んでいる	親以前の代から 雑司が谷に 住んでいる
全体 n=496	85.5%	9.1%	3.0%	1.6%
話す人 n=222	77.7%	15.0%	5.0%	2.3%

表 14. 話さない理由

	仕事やバイトで 帰りが遅い	世代が違う	話さきっかけ がない	よく知らない人と 話すことに抵抗がある	越してきた ばかりである	人付き合いが 面倒くさい
全体 n=262	19.5%	0.8%	55.0%	7.3%	5.3%	7.3%
棟別 n=145	17.2%	0.0%	58.6%	5.5%	6.2%	6.9%
階別・その他 n=116	22.4%	1.7%	50.0%	9.5%	4.3%	7.8%

表 15. 今後の交流意欲

	ぜひ話したい	機会があれば 話してみたい	特に話したい とは思わない
全体 n=262	6.9%	59.2%	30.9%
棟別 n=145	2.8%	60.0%	33.1%
階別・その他 n=116	9.5%	56.9%	25.9%

#### 4. おわりに

雑司が谷の集合住宅は、地域の至る所で更新が行われており、建物の規模もあまり関係ないことが分かった。これに伴い集合住宅居住者も頻繁に入れ替わっており、地域内には地域になじみのない居住者も多いことも分かった。

また、新住民の傾向として、棟別アクセス型の集合住宅には定住性のある居住者が入居しており、地域内での活動時間も長いことが明らかになった。一方で階別アクセス型の集合住宅の居住者は日中地域

内におらず、地域住民と顔を合わせる機会は少ないものの、大家など身近な地域住民との交流は持っていること、商店街を歩き利用していることも分かった。

結果として集合住宅居住者の地域住民との交流は、十分には行われていないことが分かった。しかし、居住者たちが地域内を歩き、地域住民と話す場所として商店街が利用されていることから、有効に利用できる場であることが考えられる。

## 註

\*1 「雑司ヶ谷」に対する表記には多種多様なものがある。筆者らがこれまでに報告してきた雑司ヶ谷研究第1～4報では、「雑司ヶ谷」と表記し、かつての雑司ヶ谷村などを含む広い地域を対象とした研究を目的としていたが、本調査では調査対象を住所が雑司ヶ谷1～3丁目としたため、本報告では「雑司が谷」と表記している。

\*2 本稿における集合住宅とは、一棟の建物に複数

の世帯が居住している建物を指し、二世帯住宅、長屋的なものは含めない。また集合住宅の居住者はその集合住宅で生活している大家などは含めるが、生活をしていない管理人などは含めない。

\*3 回答は複数回答とし、1%に満たない回答は本稿では記載していない。

## 引用文献

- 1) 総務省, 国勢調査, 人口等基本集計, 平成22年
- 2) 佐々木文子, 仁瓶浩二ほか: 集合住宅と周辺地域における居住者の生活の展開—地域環境形成から見た集合住宅計画に関する研究—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 119-120 (2001)
- 3) 泉水花奈子, 葉袋奈美子: 雑司ヶ谷研究 その5—近隣交流を促す境界領域—, 日女大紀要(家政), 61, (2014)
- 4) ゼンリン住宅地図 豊島区版, (1987~2012)

## 【第61号訂正のお知らせ】

第61号「雑司ヶ谷研究4 ——雑司ヶ谷の領域の変遷に関する研究——」住居学科 古賀碧 葉袋奈美子 の中で、下記の訂正をお願いいたします。

P56 図7題	誤: 大正	正: 昭和初期
P56 図7 (右図題)	誤: 大正10年	正: 昭和12年
P60 註7	誤: 1921 (大正10) 年第2回	正: 1937 (昭和12) 年第4回